神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

'Minshushugi' for 'Nipponjin' (2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 邦夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/537

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「日本人」と「民主主義」（続，完）

――「パックス・アメリカーナ」の下での「平和」と「民主主義」――

村　田　邦　夫

はじめに

前号[1]において，「自己決定権」といった観点から「領域的民主主義」がその形成と発展によって抱え込む「差別」と「排除」の問題点について語ったが，この「自己決定権」を「経済発展」と「民主主義の発展」との関係から捉え直したのが他ならぬ私の「民主主義」に関するモデル[2]である。

＜1970年代まで＞

A　　B　　C
［経済発展→民主主義の発展］→［経済発展$\overset{(\times)}{\rightarrow}$民主主義の発展］→［経済発展$\overset{\times}{\rightarrow}$民主主義の発展］
C　　B　　A
［経済発展$\overset{\times}{\rightarrow}$民主主義の発展］→［経済発展$\overset{(\times)}{\rightarrow}$民主主義の発展］→［経済発展→民主主義の発展］

1　これについては，拙稿「「日本人」と「民主主義」」『神戸外大論叢』（第58巻５号，神戸市外国語大学，2007年）を参照されたい。

2　この図式で示されるモデルは，元来は以下のような図式で描かれていた。
A　　B　　C
［経済発展→民主主義の発展］$\overset{(\times)}{\rightarrow}$［経済発展→民主主義の発展］$\overset{\times}{\rightarrow}$［経済発展→民主主義の発展］
（共時態モデル）
このモデルを分解してみるとき，それは次のように描かれる。
［Ａの経済発展$\overset{(\times)}{\rightarrow}$Ｂの経済発展$\overset{\times}{\rightarrow}$Ｃの経済発展］，［Ａの民主主義の発展$\overset{(\times)}{\rightarrow}$Ｂの民主主義の発展$\overset{\times}{\rightarrow}$Ｃの民主主義の発展］ところで，私がこれまで示してきたモデルは＜(×)＞と＜××＞の位置をずらしてＢの［経済発展$\overset{(\times)}{\rightarrow}$民主主義の発展］，Ｃの［経済発展$\overset{\times}{\rightarrow}$民主主義の発展］のように表してきた。このモデルの場合だと，［Ａの経済発展→Ｂの経済発展→Ｃの経済発展］となってしまい，意味するところが少しわかりにくいのだが，Ａの側からのみならず，Ｃの側からも関係を描くことができるという利点をもつ。それでこれまで私は，このモデルをもっぱら使ってきたが，いずれのモデルもその意味する内容は同じであることをここで指摘しておく。

この図式において私が描いたことは，Ａ，Ｂ，Ｃの関係の中で，その関係を前提としてはじめてＡにおいて「民主主義」が，つまり「領域的民主主義」が実現するということである。この図式の［　　］が，まさに「領域」を示しているが，この［　　］はＡにおいて「厚く」，Ｃにおいて「薄く」なる。もう少しはっきりというならば，Ｃにはこの［　　］で示される「領域」がつくられない。というのも，そこでは植民地や従属地としての歩みが一般的であり，そもそも国家の「壁」をつくることができないのである。[3]

こうした図式で描かれる［セカイ］の歩みは，前号でも示したように「大航海時代」以降の歴史とともにはじまる。日本は「開国」によって，この［セカイ］の中に組み込まれ，ＢグループからＡグループへと「上昇」[4]を目指す中で，Ａグループの連合国を構成したイギリス，アメリカ，フランス，オランダと衝突し，そして戦争に突入するのであるが，1945年８月６日，８月９日両日に原爆を投下され，そして敗戦を迎えたのだ。

私からみると，この［セカイ］は戦争によっても，基本的な構造は変わることのないものであった。戦後，再び日本はこの［セカイ］の中に組み込まれることになり，イギリスから覇権国の地位を譲り受けることになるアメリカ合衆国の占領統治下に入ったのである。アメリカの占領下において「日本国憲法」を公布，施行することになり，日本の「民主化」の歩みはそのはじまりをみたが，それはあくまでも私のモデルで描く［セカイ］の中で展開してい

3　こうした「共同体」の「壁」については，拙稿「中国の「ナショナリズム」に関する一試論―丸山眞男の「幸福な結婚」論をてがかりとして―」，『アソシエ』16号（『超国家主義の系譜』（御茶の水書房2005年所収）を参照されたい。

4　ここでいう「上昇」とそれに向けての歩みそれ自体について，私は，「望ましい」，「明るい肯定的見方」をもってはいない。むしろ私の評価は，夏目漱石が「現代日本の開化」の中で語ったように，流れに逆らったり，抗ったりして生きていくことのできない結果として受容せざるをえないとするものである。この「上昇」を，司馬遼太郎は『坂の上の雲』の中で，「小説」として，「物語り」として，前向きな歩みとして描いた，と私はみている。司馬の意図がどのようなものであれ，読者の多くはその「小説」（物語り）の中に，「現実」を理解してしまったことから，「坂の上の雲」を目ざすことが，その当時（明治期）の明るく健気な「生き方」として理解されることによって，私のモデルで描くＡ，Ｂ，Ｃの関係の中で，その明るさや健気に生きることを否定（差別，排除）された現実の人々の存在を，見えにくくさせてしまった，そう私はみている。

くのである。[5]

（一）

それでは，ここまでの話をもとに前号で紹介した『産経』の「くだり」を検討してみよう。行論の都合上，ここに再度引用しておく。

＜大切なことは，理想と現実のジレンマを抱えて「どちらかを選べ」という単純な二元論に陥ってはならないということだろう。戦後日本は平和憲法を掲げる一方，日米安保体制を通じて平和と繁栄を築いてきた。核廃絶の理想に向かって歩を進めながら，核の傘に依存してきたのはその一つの縮図ともいえる。だとすれば，日本が進むべき道もその両立にある。＞[6]

このくだりにあるように，「日本が進むべき道」として，「理想と現実のジレンマ」を認めると同時に，「その両立にある」というようなことでいいのだろうか。そもそも，平和憲法の「平和」と，日米安保体制の下での「平和と繁栄」との関係は，あるいは，核廃絶をめざす動き（理想）と核の傘に依存する生き方（現実）との関係は，「ジレンマ」の関係として位置づけ捉えることに問題点はないのだろうか。もう少し踏み込んでいうならば，「理想」と「現実」の関係を「矛盾」したものとして位置づけ理解してかまわないのだろうかという点である。

現実に「ジレンマ」を抱えている，あるいは現実と理想が「矛盾」した関係にあるとして，日本における「平和」と「核」の問題について理解しようとするその見方それ自体に大きな問題があるのではないだろうか。ここで大切なのは，「ジレンマ」とか「矛盾」を抱えているから厄介な問題となるのではなく，むしろ逆に，「理想」と「現実」の両者の間に相互補完的な関係

5　こうした観点から私は，戦前，戦中と戦後を一つの「連続」したものとして捉えるのだが，これに対して，「断絶」したものとして理解する見方もある。また「1940年体制」（論）のように「連続」してみる立場もあるが，それぞれ何をもって「連続」とみるか，「断絶」とするかは，その「基準」の違いによる。たとえば，これについては，中村政則著『戦後史』岩波書店（新書）2007年でも取り上げられている。

6　これについては，前掲拙稿「「日本人」と「民主主義」」112頁を参照されたい。

が，「矛盾」なく成立しているという点にこそ問題があるとみるべきである。ところがそれにもかかわらず，そのように論を設定することができないできたところに，私はゴマカシというかギマンがあったとみるのである。このギマン的態度というか姿勢によって，「理想」として本来は設定すべきでない，されるべきではない「平和」が，「平和憲法」の「平和」をもち出すことによって「現実」（のもの）として位置づけられてしまい，そのために，その「対」概念として，本来は「理想」として設定されるべきものが用意されるべきであるにもかかわらず，実際にはそのように位置づけられない「パックス・アメリカーナ」の「パックス」の下で，展開されてきた日米安保体制の「現実」がそのまま位置づけられてきたのである。もし本当にこの記事にあるように，記者をはじめ，読者が同じようにそれを「ジレンマ」だとか，「矛盾」した関係として認め，それを踏まえてその「両立」をめざすといった論を支持しているとしたら，われわれの理解の仕方には重大な過誤があったといわざるをえない。これについて以下でもう少し論を展開してみよう。

（二）

「パックス・アメリカーナ」の「パックス」をつくり出す「仕組み」と切り離して，「日本」と「日本人」を，その「生き方」を，そもそも語ることが，位置づけることが可能なのであろうか。私の描くモデルの［セカイ］の中で「日本」と「日本人」はつくられてきたのである。たとえ「日本」と「日本人」が「独立」した国家にあり，その国民であったとしても，この［セカイ］から「独立」することは不可能なのではあるまいか。この「モデル」の中の「関係」を首尾よく順調に維持，発展させていくための「理想」としての「平和」憲法の「平和」であったのではあるまいか。[7] そう考えるなら，この［セカイ］の中心的担い手は，「親分」は，他ならぬ「覇権システム」の監

7　こうした観点からの見方に対して，「天皇制」との関連から示唆を与えてくれるものとして，加藤哲郎著『象徴天皇制の起源―アメリカの心理戦「日本計画」』（平凡社（新書）2005年）がある。

督者であったアメリカであったのである。そのアメリカによって，「平和」憲法は「押し付け」られたのではなかったか。そうみていくとき，「理想」と「現実」は本当に「ジレンマ」として，あるいは「矛盾」したものとして捉えていいのだろうか。もし，そのように理解してしまうならば，われわれは，覇権国の枠の中の「パックス」の問題点だけでなく，「民主主義」の抱える問題点すら，はじめから見い出すことはできないままになってしまうのではないか。事実，「あの戦争」以後，そうした状態の中に「日本」と「日本人」は置かれ続けてきたと私はみるのである。

付言すれば，こうした結果（帰結）として，今日の「格差」社会を迎えたと私はみるのである。そこには，「パックス・アメリカーナ」の「パックス」をつくり出してきた「関係」の変容（変化）があったことを忘れてはならない。すなわち，それは［$A \overset{(\times)}{\rightarrow} B \overset{\times}{\rightarrow} C$］から［$B \overset{(\times)}{\rightarrow} C \overset{\times}{\rightarrow} A$］の図式で描かれる［セカイ］をつくり出し，支える「関係」（史）である。こうした「関係」（史）から，「平和」憲法の「平和」の掲げる「理念」と「現実」を捉え直すことが何よりも大切であると私は主張したいのである。換言すれば，「理想」とする「内容」の中に，私のモデルで描く「現実」の「関係」と切り結ぶことのできるもの（内容）がはじめから存在していないのであれば，それは「理想」を語ってはいない。それにもかかわらず，「日本人」はいつも「現実」と向き合っている，向き合えるかのように「理想」を，「平和」を論じてきたのではあるまいか。先述したように，米中「覇権連合」の形成，発展を導く「経済発展」と「民主主義の発展」により織り成される「関係」に対峙できる「理想」の構想が何よりも不可欠ではあるまいか。[8]

（三）

ここで，柄谷行人がカントの理念に関する区別にもとづいて「平和」憲

8　こうした米中「覇権連合」の形成，発展の時期は，「多極化」とか「無極化」と呼ばれる時期である。

法について語っているくだりを検討してみたい。柄谷は，カントが理念を「統整的理念」と「構成的理念」の二種類に区分していたことを紹介している。前者は，「実現できないけれども非常に高い目標としてあって，絶えず現状に対する批判の源泉になるようなもの」であるのに対して，後者のそれは，「みんなが通常，理念と呼んでいるもの」であり，「社会を設計して，自分が構想するとおりに作り替えていくという考え」として整理している。

柄谷はそうした理念区分をもとにしながら，「憲法９条は統整的理念」であり，「『現実に合わない』と言われたら，それは初めから現実に合わない」と述べている。これに対して，私は「第９条」は「構成的理念」にほかならないと，すなわち，「パックス・アメリカーナ」の「パックス」の下でつくられた「平和」憲法の「平和」であるとみるのである。その意味で，柄谷の区分に従っていえば，戦後ずっと「日本人」は一貫して「構成的理念」をあたかも「統整的理念」であるかのように「神棚」に祭り上げてきたといっても過言ではない。「平和」憲法と「パックス・アメリカーナ」の「パックス」との関係を問いただすことのできる統整的理念として「へいわ」を創造することができないままに，「パックス」とそれをつくり出す国際政治経済関係を自ら担い，支え続けることに与ったのである。

柄谷の言葉を借りると，「平和憲法」の「平和」は，GHQ 主導での下で，「社会を設計して，自分が構想するとおりに作り替えていくという考え」によって提示されたものであったからこそ，はじめは文字どおりに「一切の武器を所有することのない」「平和」であった状態から，朝鮮戦争の前後から次第にその内実を変えていったとみることができるのではあるまいか。それゆえ，「日本人」がこれから試みるべき課題は，統整的理念としての「平和」を導くことのできる国際政治経済関係の在り方をセットとして提示することであると強調しておきたい。またその際に付言すれば，カントの『永遠平和のために』の「平和」についての理解の仕方は，柄谷に従うと，それは「構成的理念」であった，と私は理解している。それは「平和」のための「第一

確定条項」，「第二確定条項」，「第三確定条項」がまさに私のモデルで描く［セカイ］を前提として実現されるからにほかならない。すなわち，「覇権システム」とその「秩序」を前提としてつくり出される「平和」であるのである。つまり，「パックス」により，「パックス」の中で創造される「平和」ということである。カントの「平和」を，柄谷のように，「統整的理念」と結びつけて論じることに対して，私は異議を申し立てるのである。もちろん，それを踏まえて，柄谷と「平和」を共に創造していくことは可能であると，当然のことながら考えている。[9]

（四）

それでは再び『産経』の記事のくだりに戻ろう。ここでは，「平和憲法」の「平和」と，日米安保体制の下での「平和」を，前者が「核廃絶の理想」に，後者が「核の傘」の下での「現実」に結びつけられる形で述べられている。しかし，前者の「理想」としての「平和」と，後者の現実としての「平和」とは，記事にあるように，「矛盾」するものであろうか。私はそうみない。むしろ，相互に補完し合っているものと私はみている。もう少しこの点について掘り下げてみよう。

1940年代から50年代にかけて，「パックス・アメリカーナ」の形成，確立の歩みの中で，私のモデルで描く［セカイ］は大戦中のドイツ，イタリア，日本に代表される反抗，敵対勢力の撹乱に直面してその動揺を余儀なくされたものの，それら諸国の敗北と再編入によって再編強化されていった。[10]こうした「覇権システム」とその「秩序」の円滑な維持，発展によって実現されるのが，まさに「パックス・アメリカーナ」の「パックス」であり，その「パックス」を現実のものとするのに中心的な存在として位置したのが，覇権国のアメリカ合衆国であった。日本の占領政策の重要な構成要素であったのは，

9　柄谷の見方については，『論座』 朝日新聞社　2008年・10月号　29－30頁を参照。
10　これは，今日のアフガニスタン，イラクへの米国の介入にも共通した「目標」として掲げられるものである。

今日的表現を使って言い表わすならば，「自由化」，「民主化」と「市場経済化」であり[11]，それによって，私のモデルで描く[セカイ]の順調な発展が担保されるのである。もっとも，その際，「日本」がＡ，Ｂ，Ｃのどのグループに属するかははっきりとしないにせよ，いずれに位置したにせよ，各々のグループに振り当てられていた「自由化」，「民主化」，「市場経済化」の「段階」と「役割り」を担うことが要請されていたわけである。敗戦とその後の占領といった状況，状態を踏まえれば，Ｃグループか，あるいはＢとしても限りなくＣに近いＢに位置づけられたであろうことは容易に予想されたであろう。

こうした経緯の中で，「日本国」憲法は制定されたのであるから，その憲法の「理念」（「理想」）と「現実」は，先の［セカイ］とまったく矛盾するものではなかったのであり[12]，矛盾することを許すものではなかったとみることが大切である，と私は強調しておきたい。「平和憲法」の「平和」がたとえ核廃絶に向けての第一歩として仮に認めたにせよ，それが，私のモデルで示した[セカイ]，つまり核そのものを生み出し，使用し，その脅威でもって支配構造を維持し続ける「覇権システム」の「世界」をハイゼツする第一歩として認められていたわけではなかったことも確かなのである。私のモデルで描く[セカイ]を前提とする，その［セカイ］の「関係」を維持し，発展させることを当然とするなかにつむぎ出される「理想」なのである。この平和憲法の「平和」は，その意味で，福沢のいう「産物の国」と「製物の国」との関係をまったく不問に付してもかまわない，あるいは，許してしまう「平和」であった。「理想」として語られる「平和」の中に，およそはじめからこうした「衣・食・住」のネット・ワークをどのように確保するかといった「理想」（論）が欠如している，あるいはそれを含み込み，結びつけようとしな

11　これらは「近代化」のバックボーンを構成するものである。「近代の超克」とは，この「市場経済」とそれに結びついた「自由化」，「民主化」を，まさに「超克」する試みであると私はみる。そして今こそその試みが大切であるとも考えている。

12　これについては，拙著『覇権システム下の「民主主義」論－何が「英霊」をうみだしたか』（御茶の水書房2005年の＜第７章「覇権システム」とその「秩序」を支え続けた「平和憲法」と「護憲」運動＞を参照されたい。）

い「理想」,「理念」であったのである。

それを私のモデルを使って示すならば,［Aの経済発展→Bの経済発展→Cの経済発展］である。この関係はまさに「帝国主義」を示すものである。これに対して，私がモデルで描いているのは,［Aの民主主義の発展→Bの民主主義の発展→Cの民主主義の発展］の関係である。これも,「帝国主義」の関係を示している。前者を「経済的」な「帝国主義」として示すならば,後者は「政治的」な「帝国主義」として位置づけられる。いずれにせよ，この「経済的」,「政治的」に相互に関係した「帝国主義」の［セカイ］に対して,この「日本国憲法」の,「平和憲法」の「平和」は，帝国主義と平和憲法下の「平和」と切り結ぶことをはじめから想定していないのである。このモデルの［セカイ］の中でつくり出される「日常の戦争」（日常レベルの命と命のヤリトリ）とそれにともなう生活破壊と向き合わない「平和」なのである。そうした「理想」をつくり出したのは，他でもない「パックス・アメリカーナ」の「パックス」であり，それ（「パックス」）を導き出したモデルで描く［セカイ］である。つまりA，B，C各々の「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係」とその「歴史」（「関係史」）によって織り成された［セカイ］である。[13]

（五）

ところで，先に紹介した『産経』の記事にある二つの「平和」について,

13 「パックス」の含みもつ「抑圧」ならびに「差別」と「排除」について，私はその「平和」なるものが,［A→B→C］や［Aの経済発展→Bの経済発展→Cの経済発展→Cの民主主義の発展］,あるいは［Aの民主主義の発展→Bの民主主義の発展→Cの民主主義の発展］といった図式で描かれる「関係」をつくり出し，支えるものであると同時に，そうした「関係」からなる［セカイ］がつくり出す「平和」であるとみている。これに関連して，子安宣邦はイバン・イリイチの著作を紹介しながら，＜…平和（ヘいわ）とはそれぞれの住民が平穏に生活することである。それは輸出されたり，強制されたりするものではない。だが平和は輸出されるのである。輸出される平和とは，いわゆる「帝国の平和」である。それは裏側に競争をもった平和である。押しつけられる平和とは戦争であることを，私ははじめて深く覚ったのである。「帝国の平和（パックス）」の別名は戦争であるというイリイチのこの指摘は…＞と語っている。なおそれについては，子安宣邦『「近代の超克」とは何か』（青土社　2008年　113－114頁）。

これまでの論の展開をもとにして再度ここで考察してみよう。核廃絶の「理想」に向かって歩を進めるにしても，また「平和憲法」の「平和」を実現するにしても，当然のことながら，それらは日々の暮らしを前提としてその営みの中で試みられるものである。すなわち，日常の生活と，理想とその実現に向けての試みは切り離すことのできない関係にある。そしてその「日本人」の日常の生活は，私からすれば，まさにこれまで何度も紹介してきたあのモデルの［セカイ］をもとに営まれている。そこでは，まさに福沢の『文明論之概略』を紹介した長谷川三千子が「難病としての外国交際」において見事に論述しているように，たとえ第９条を「日本」と「日本人」が守り続けたとしても，それと関係なく「富の吸い上げポンプ」によって多くの人命が奪い取られている[14]わけだから，われわれの日々の生活空間それ自体が日々の生活における「ヘイワ」を脅かすものになっている。それゆえ，この「ヘイワ」と『産経』の記事のくだりにある二つの「平和」を結びつけて考察することがやはり重要だと私は考えるのだが，しかし，そのような方向へと「平和」をめぐる議論は導かれない。「平和」はいつも「ヘイワ」と向き合うことなく，その「対」関係とされる「戦争」へと結びつけられていく。

つまり「原爆投下」論争[15]が，本来向き合うべきだと思われる「ヘイワ」と，それが問題となる私のモデルの［セカイ］と結びつけられないままにあるわけだ[16]。日本における「自殺者」は毎年３万人を超えているが，それが10年以上も続いている。この問題も，まさに「ヘイワ」と「平和」が結びつけられない典型的な例の一つである。

行論の都合上，ここで『毎日』（2008年８月16日付）の記事を紹介しておこう。ここで私が提起している「ヘイワ」と「センソウ」，そして「平和」と「戦争」を考えるに際しても，有益かつわかりやすく問題の所在のありか

14　長谷川三千子「難病としての外国交際『文明論之概略』考」（『Voice』1987年10月号 PHP研究所）を参照されたい。
15　これについては，上掲拙稿 102－103頁を参照されたい。
16　これについては，拙著『「日本人」と「民主主義」－エッセー風モノグラフ－』（神戸外国語大学研究叢書　第41冊，2007年），とくに71－77頁，137－143頁を参照されたい。

を垣間見せてくれる内容となっている。その記事「戦争と水俣病」の中で，大島秀利（科学環境部）は，水俣病を問い続けた写真家のユージン・スミスの「写真展」「没後30年W・ユージン・スミスの写真」）を紹介しながら，水俣病で亡くなった「犠牲者」と太平洋戦争で戦死した日本兵，米兵の「遺体」の写真が「不思議と重なってみえた」と述べている。そして，「日本の太平洋戦争と，公害という産業戦争」を並立的に位置づけている。大島のいう「太平洋戦争」を「戦争」として，水俣病に代表される公害の「産業戦争」を「センソウ」と置き換えてみる。そこからまた前者の「戦争」の「対」概念として「平和」を位置づけ，後者の「センソウ」に対しては「ヘイワ」を位置づけてみる。そうすることによって，「戦争」と「平和」，「センソウ」と「ヘイワ」，「戦争」と「ヘイワ」，「センソウ」と「平和」，そして「戦争」と「センソウ」，「平和」と「ヘイワ」を各々のレベルで関連づけて考察できる思考の枠組みをつくることが可能となる。そうした枠組は大切であり，またそれらを「民主主義」と「ミンシュシュギ」と結びつけて問い直すことが重要であると，私はこれまで論じてきたのである。[17] 今一度，大島の記事を紹介することによって，これらの問題に注意を促したいのである。付言すれば，毎年日本のジャーナリズムは，８月にはいつも決まって「平和」と「戦争」を取り上げるのだが，残念ながら，日本の各紙の記事（社説，論説も含めて）において，大島が問いかけようとした「視点」を見い出すことができなかった。

（六）

原子爆弾による死，通常兵器による死，いわゆる「戦争」にともなう「死」と，日常生活の中の「センソウ」，換言すれば，福沢が言及したように，「平時は物を売買して互いに利を争い，事あれば相殺す世の中」にある，平時における利の争い（「センソウ」）における「死」との間に一体いかなる距離が

17　これについては，拙稿『「民主主義」論の新たなるパラダイムを求めて―「民主主義」の構造転換を理解するために―』（『「民主主義」に関する研究』『外国学研究』神戸市外国語大学研究所　2009年３月）所収。

あるのだろうか。その際，われわれは決まって前者の「戦争」との対関係としての「平和」については語るのだが，後者の「センソウ」と「ヘイワ」との関係についてはほとんど語られないままに今日に至ったといっても過言ではない。こうした問題に対して私は次のように構想してきた。

私のモデルで描く［セカイ］の中で，第Ⅰ期（［権威主義的性格の政治→経済発展］）から第Ⅱ期（［経済発展→分厚い中間層の形成］），そして第Ⅲ期（［分厚い中間層の形成→民主主義の発展］）へと「民主主義の発展」の「高度化」を各国，各地域は目指すことを余儀なくされることによって，いつも「センソウ」状態に置かれ，それがある場合には「戦争」へと至ると私はみているが，これは福沢が「外国交際」について述べた先のくだりに一致している。すなわち，「平時は物を売買して互いに利を争い，事あれば相殺すなり」にあるように，「センソウ」と「戦争」との相互の関係である。[18] それを私は，「経済発展」と「民主主義の発展」の関係から織り成される［セカイ］として位置づけ，モデルで描いたのである。

このように考察してきた私からすれば，「平和」を実現するためには，まさに「パックス・アメリカーナ」の「パックス」に代わる「へいわ」が求められるのである。それゆえ，その「パックス」をつくり出す，［Aの経済発展$\overset{(\times)}{\rightarrow}$Bの経済発展$\overset{\times}{\rightarrow}$Cの経済発展］の関係を，別の異なる関係へと置き換えることが求められる。そして同時に，［Aの民主主義の発展$\overset{(\times)}{\rightarrow}$Bの民主主義の発展$\overset{\times}{\rightarrow}$Cの民主主義の発展］の関係を，別の異なる関係へと置き換えることが求められるのである。換言すれば，

A　　B　　C
［経済発展→民主主義の発展］→［経済発展$\overset{(\times)}{\rightarrow}$民主主義の発展］→［経済発展$\overset{\times}{\rightarrow}$民主主義の発展］
C　　B　　A
［経済発展$\overset{\times}{\rightarrow}$民主主義の発展］→［経済発展$\overset{(\times)}{\rightarrow}$民主主義の発展］→［経済発展→民主主義の発展］

18　これについて長谷川は，ある意味で，「通常の戦争」より恐ろしいものとして「商売」（貿易）による「戦争」を位置づけている。「通常」の，一般的に言われる「戦争」がこの「商売」による「戦争」を前提としている（そしてその延長にある）ことを鑑みれば，このように両者を結び付けて理解することが大切であると私はみている。なお詳しくは，（注）の（14）を参照されたい。

で描かれる「経済発展」と「民主主義の発展」の関係を，別の異なる関係へとつくり変えていくことが必要不可欠となるのである。

ところで，日本のマスコミは，『産経』も，『朝日』もそうなのだが，「戦争」と「平和」を語る際，日常生活レベルにおける「センソウ」と「ヘイワ」と結びつけて語ってこなかったのである。それはまた多くの「日本人」の「戦争」観，「平和」観にも多大な影響を与え続けることになったといえる。そうした点に加えて，われわれ「日本人」の語る「民主主義」は，「戦争」と「平和」にもっぱら結びつけられたものとなり，「センソウ」と「ヘイワ」と関連づけられるものとはならなかったのである。すなわち，それは以下のように要約できる「民主主義」観にも垣間見ることが可能である。＜「日本」は「民主主義」の社会を実現しなかったことから，無謀な「戦争」へと「日本人」を導くことになってしまい，あのような悲惨な状態を体験せざるをえなくなったのだ。したがって，GHQの占領下に置かれ，たとえ押し付けられたにせよ「平和」憲法を抱くことによって戦後の「日本」は「民主主義」社会となり，それによって「平和」を手にすることができたのである。もう二度と日本は「戦争」を繰り返してはいけない。「平和」を守らなければならない。「民主主義」の社会を大切にしなければならない。＞多くのものは，このようなことを戦後ずっと発言し続けて今日に至ったのである。そのために，この「平和」を守ることが，また「民主主義」の社会を大切にすることが，私のモデルで描く［セカイ］の維持，発展に手を貸すことにつながり，そのために日常生活のレベルにおける「センソウ」を絶えずつくり出すことになり，「ヘイワ」を手にすることさえも困難な立場に置かれ続ける人々を，世界のここかしこに生み出し続けることになるわけである。これほどの「虚偽」と「軽薄」が一体どこにあるのだろうか。「原爆投下」の歴史を持つ「日本」と「日本人」が目指すべきは，［Aの経済発展$\overset{\times}{\rightarrow}$Cの民主主義の発展］や［Aの民主主義の発展$\overset{\times}{\rightarrow}$Cの経済発展］で描かれる関係からなる［セカイ］を告発していくことではなかったのか。こうした［セカイ］とは異なる［セカイ］

（世の中）を創造するために「日本」として，「日本人」として何ができるかを喧々諤々論ずべきではなかったろうか。

こうした［セカイ］の中で生き続けた結果として，今日の「格差社会」と呼ばれる中に「日本」と「日本人」は直面することを迫られたと私はみている。「戦争」の悲惨さとそれに対比される「平和」を，われわれ「日本人」はこれまで何度となく語ってきたのだが，それにもかかわらず現在われわれはまさに「日常のセンソウ」によって「ヘイワ」を脅かされている。その一つの帰結として，「格差」社会を捉えることが大切であると私はみている。

（七）

こうした観点から日本の社会科学にかかわった研究者の業績を回顧するとき，そこに恐るべき論の展開を垣間見ることはいかんともしがたく，また残念なことである。篠原一の『ヨーロッパの政治』の中で語られている以下のくだりは，まさに「平和」と「ヘイワ」，「戦争」と「センソウ」とが切り結ぶことなく（またそのような関係として位置づけられることもなく）あり続けてきた一つの例証である。と同時に，『産経』の核廃絶の理想と現実のくだりを髣髴とさせるものであり，「パックス・アメリカーナ」の「パックス」と「平和」憲法の「平和」とがまったく矛盾することなく相互に補完しあっている関係を，「日本」と「日本人」が後生大事に戦後一貫して言い続けてきた証となるものである。篠原は述べている。

＜……一八七〇年を境として，ヨーロッパではポリアーキー化ないし民主化の段階に入る国々が出現し，その後ポリアーキーは，紆余曲折をへながらも，およそ百年の歴史の中で，その内実と外縁の双方において著しい発展を遂げることになった。…一八七〇年から第一次世界大戦までがポリアーキーの発展のためのよき時代であったとすれば，戦間期はポリアーキーが世界的に拡大浸透したにもかかわらず，やがて反動の時代を迎える。「民主主義の危機」の時代であり，第二次世界大戦，パックス・アメリカーナの到来とと

もに，ポリアーキーは完成の時代を迎えた。……＞[19]

このくだりにあるように，篠原の「民主主義」の見方は，あまりにも一国（地域）枠的なものとなっていると同時に，「民主主義の発展」を「経済発展」と結びつけて考察しようとする態度（姿勢）はまったくみられない。「パックス・アメリカーナの到来とともに，ポリアーキーは完成の時代を迎えた」ということの「意味」を，失礼ながら篠原は理解することができないのではないか，そう私は言わざるをえないのである。勿論それは，篠原が「経済発展」を，そうした発展の「関係」を，「民主主義の発展」から切り離しているからだと言えないこともない。

しかし，「パックス・アメリカーナ」というとき，それではアメリカはどのようにして「覇権国」となったのか。「覇権国」となるためには，アメリカよりも力の劣る諸国や諸地域を，まさに「経済的」意味での「帝国主義」の関係をつくり出だすことに成功したということと切り離すことができないのではないだろうか。まさに猪口邦子が「覇権国」の「定義」として，その時代の剰余価値を創出するに際してナンバー・ワンとなった国と述べるとき，[20] 私のモデル，［Ａの経済発展→(×)Ｂの経済発展→×Ｃの経済発展］（あるいは［Ａの経済発展→Ｂの経済発展→Ｃの経済発展］）の図式で描く関係を形成し発展させることに首尾よい成果を収めた国ではなかったのか。つまり，覇権国が，多くの国や地域を自らの支配下，影響力の下に置くことにより，それら諸国と諸地域とそこで生活する人々の「自己決定権」が奪われていく，基本的人権が十分に保障されない仕組み，すなわち「覇権システム」が構築されていくことに与ったわけである。

その仕組みの下で，ともに「完成の時代」を迎えるといわれる「民主主義」（ポリアーキー）とは一体いかなるものであり，どのようなことを物語っているのであろうか。いやしくもこうした篠原の論を認めることでよいのだろ

19　篠原一著『ヨーロッパの政治［歴史政治学試論］』（東京大学出版社　1986年　71頁）
20　これについては，前掲拙著『覇権システム下の「民主主義」論』99頁。

うか。この篠原の論の展開は，日本の，「平和」憲法の「平和」が「パックス・アメリカーナ」の「パックス」（「平和」）と互いに手をとって，相携えて歩んでいく様を，なんの「矛盾」もなく，違和感も抱くことなく表明したものと理解できるのではないだろうか。

また篠原は続けて次のように述べている。

＜……ところで，北西ヨーロッパでは政治的抑圧なしに民主化が進行したが，ここでもっとも早くポリアーキー，それも競争的民主主義が整備されたのは，いうまでもなくイギリスであった。……＞[21]

ここで注意したいのは，篠原が「北西ヨーロッパでは政治的抑圧なしに民主化が進行したというとき，誰に対する政治的抑圧がなかったのだろうか。篠原がいう，「もっとも早く～いうまでもなくイギリスである」というそのイギリスは，すぐ隣のアイルランドに対して，政治的抑圧を，それこそクロムウェルのアイルランド征服以降ずっと行ってきたのではなかったか。ここで私は一つ一つの細かい歴史的出来事を持ち出して篠原を批判する意図はさらさらない。そうではなく，ここでいう「政治的抑圧」がまったく他の国や地域，ならびそこに暮らす人々と全く関係づけられないで語られていることが問題ではないか，そうみるのである。すなわち，［Aの民主主義の発展Bの民主主義の発展$\overset{\times}{\rightarrow}$Cの民主主義の発展］の図式で示される「民主主義の発展」の「関係」にみる「政治的抑圧」が，BやCに対する「人権」抑圧が視野の内に含まれていないのである。そしてこの政治的抑圧，すなわち，「政治的」レベルにおける「帝国主義」と，「経済的」レベルにおける「帝国主義」の関係をもっとも強力に形成し，また維持，発展させていくのに成功したのは覇権国のアメリカとともに，その前の覇権国であったイギリスではなかったのか。

21　篠原 前掲書 73頁。

（八）

ところで，先述したように，篠原の「民主主義」論には，「民主主義の発展」を「経済発展」と結びつけていないといった問題（点）が見られる，と私は指摘したが，そうしたことが逆にまた奇妙な，不思議な論につながっていく。たとえば，次のくだりである。

＜……イギリスの産業は企業家精神を失って今日の経済的停滞を招くことになったと批判されるが，しかし，経済繁栄の頂点の時代に，人間的なものを追求した十九世紀のイギリスは，それだけに輝きをもっている。そして一八七〇年以後のポリアーキー体制の下においてこのジェントルマンシップは，イギリスの民主主義を内から支えるエートスとなった。……＞[22]

ここには，イギリスがインドを政治的にも経済的にも抑圧していく「典型」的な「支配－従属」関係が，まったく捉えられていない。たとえば，篠原がいうイギリスの産業が企業家精神を失っていくとみられる19世紀の後半において，イギリスはインドを大英帝国の中に「公式」レベルでも組み込むことになるが，そのイギリスとインドの関係を通して，イギリスはさまざまな経済的利益を享受することに与るわけである。このことによって，イギリスは「世界の工場」から「世界の銀行」へと，まさに世界の「金融・サーヴィス」の中心に位置するように産業構造を転換することに成功するのである。いわゆるイギリスの「多角的貿易決済機構」として成立するイギリス本国を中心とする一大経済圏の到来にインドの担った役割りは重要であり，必要不可欠な存在であった。こうした仕組みの下に，イギリスはその後の経済的「衰退」を，イギリスの「金融利害」グループが中心となり，他の諸国との関係において自ら「選択」していくことができたのである。[23]そこには篠原のいう「人間的なものを追求した」姿とはまったく異なり，「金利生活者」国家として，「マネー」をひたすらむさぼり求めていく「人間臭さ」を追求していく姿が

22　同　上掲書 77－78頁。

23　これについては，拙著『イギリス病の政治学―19－20世紀転換期における自由主義による危機的対応過程』（晃洋書房　1990年，とくに＜第８章イギリスの選択＞）を参照されたい。

見い出されたのである。インドをはじめ，中東，アフリカ，アジア，ラテンアメリカといった諸地域，諸国に対する政治的，経済的抑圧によって，「社会帝国主義」国家をつくりあげていったのである。なぜこうした出来事をもっときちんと捉えて理解することを試みなかったのか，不思議である。私からみれば，M・ウイーナー流の「イギリス文化」論で語られる「イギリス文化」が，イギリスの，イギリスを中心としてつくられた大英帝国の，あるいは世界システムの形成，発展を導くに至った社会的経済的関係と全く切り離されて描かれている[24]ことを，残念ながら，篠原が理解できなかったことにより，このような「人間らしいものを追求…それだけに輝きをもっている」イギリス文化といったくだりとなったのだと思われる。篠原の「民主主義」論は，ここにある「イギリス文化」（論）を，「イギリスのポリアーキー」（論）に置き換えて語られている，と私はみるのである。

（九）

このような「民主主義」論でもって，「日本人」の「民主主義」の実現に向けての「歴史」がはたして語れるのだろうか。このような篠原の「民主主義」論から「ドイツ特有の道」論争を的確に整理し，その「論争」をより望ましい方向へと導くことを期待できるのであろうか。その答えは「否」である。これについては既に拙著でも論述しているので，これを読者には参照していただきたいのだが，ドイツの「民主主義」実現に向けての歩みを「不正常な」発展として一方でみながら，篠原は，他方で「正常な」発展として，「パックス・アメリカーナ」のアメリカや，「パックス・ブリタニカ」のイギリスといった覇権国の「民主主義」実現の歩みを位置づけている[25]ことを鑑みると

24　これについては，同　上掲拙著 ＜第７章イギリスの二つの文化＞を参照されたい。

25　これについては，拙著『史的システムとしての民主主義―その形成，発展と変容に関する見取り図―』（晃洋書房1999年，214－220頁）を参照されたい。それにしてもである。「パックス・ブリタニカ」の中で「ポリアーキー化」が見事に進展したと一方で語りながら，他方において当時の日本経済との比較で，イギリス経済を，停滞しているとはいえ「人間らしい文化」とほめちぎっている篠原による論の展開である。なんと無残なことか。

き，私はここでも「民主主義」（論）の見方を従来とは異なる，まったく「次元」を異にする，すなわち，修正とか，オールタナティブといった見方ではない「ミンシュシュギ」（論）の見方[26]が求められていると強調，確認しておきたいのである。

ところで，篠原によるこれらのくだりは，前号で紹介したＥ・Ｈ・カーの「パックス・ブリタニカ」と「自由民主主義」との関係についての見方[27]にも該当している。

ここでさらに付言すれば，かつての新左翼の運動家が，丸山眞男を批判して，「議会制民主主義」の，「戦後民主主義」の「擬制」を批判したのだが，彼ら新左翼は，またその批判者たちも，そこから，その批判から（その反批判から），私のモデルで描く［セカイ］それ自体の批判へと自らを導くまでには至らなかった，と私はみている。その意味では，彼らもまさに「パックス」それ自体にはなんら「異議申し立て」をするものではなかったわけである。すなわち，私のモデルで描くあの[セカイ]とその形成，発展に対する批判や「異議申し立て」にもとづく「（戦後）民主主義」批判（反批判）ではない。すなわち，私のモデルのあの[セカイ]とまったく切り結ぶこともない

26　これについては，前掲拙稿「「日本人」と「民主主義」」112－115頁を参照されたい。

27　たとえばこれについては，市野川容孝も「左翼と議会制民主主義」（『論座』　朝日新聞社2007年４月号　82頁）において，以下のように述べている。＜確かに，60年安保において，議会制民主主義は「擬制」に転落したのかもしれない。しかし，議会制民主主義を嘲笑いつつ，その外側に「真制」があるとした新左翼そのものが，別種の擬制に転落し，また議会制民主主義をさらに擬制たらしめているのではないか。＞このように指摘し，吉本や新左翼を批判しながら市野川は，＜「擬制の終焉」―60年安保に際して，吉本隆明はそう述べつつ，「真制」の在り処を，議会制民主主義のその外側に見いだそうとしたけれども，この否定をくぐり抜けつつ，私たちは，そのあらぬところのものである「真制」を，もう一度議会制民主主義の中に見いだしていくべきなのではないか。＞と結論づけている。私は，「擬制」，「真制」にかかわる議論を，［Ａの民主主義の発展→Ｂ(×)の民主主義の発展→Ｃ(×)の民主主義の発展］や［Ａの経済発展→Ｂの経済発展→Ｃの経済発展→Ｃ(×)の民主主義の発展］，あるいは［Ａの民主主義の発展→Ｃ(×)の民主主義の発展］の図式で描かれる関係と結びつけて問い質すことが大切だとこれまでの論考で語ってきたのだが，このような見地からみるとき，「新左翼」も，それに反論する市野川の論も，「民主主義」が直面する今日の「格差」社会とそれが抱える問題に，十分に向き合えないのではないかと危惧している。問われるべきは，「議会制民主主義」をつくり出す仕組み（構造）にみられる「差別」，「排除」の「関係」ではあるまいか。その「関係」にこそ「メス」を入れるべきなのに，そこからほど遠い「二義的な」問題を，あたかも「真制」だとして論争してきたその姿にこそ「擬制」を垣間見ざるをえないのである。

ままに今日に至っている。そしてそれは，吉本隆明が，戦後世代の中間層の形成に関して，肯定的に評価するところにも垣間見ることができる。[28] 吉本も，その意味では，［セカイ］と向き合わないままに論じているのである。

このようにみてくると，「日本」と「日本人」の「戦争」，「平和」，そして「民主主義」の見方は，漱石に従えば，「皮相上滑り」の理解であり，捉え方であったとしか言いようのないものではあるまいか。私はそうであったと言わざるをえないのである。

28　これについては，アンドルー・ゴードン著　森谷文昭訳『日本の200年　徳川時代から現代まで（下）』（みすず書房 2006年）564－565頁。